

## 佐賀県のA群溶血性レンサ球菌について (平成22年度)

細菌課 諸石早苗

キーワード：A群溶血性レンサ球菌 T型別検査 結核・感染症サーベイランス事業  
希少感染症技術向上事業 溶血性レンサ球菌レファレンス事業

### 1 はじめに

佐賀県感染症情報センター機能強化の一環として、対象医療機関10ヵ所から菌株を、また、感染症発生動向調査事業の一環としては小児科2医療機関を病原体定点に指定し、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎を疑われる検体を収集し、A群溶血性レンサ球菌およびT型別検査を実施した。その平成22年度の収集・分析結果を報告する。

なお、平成3年4月から結核・感染症サーベイランス事業および希少感染症技術向上事業の溶血性レンサ球菌レファレンス事業の一環として九州3県(大分、沖縄、佐賀)の共同調査に参加し、菌株を大分県に送付している。その情報還元として、年1回九州および全国の発生状況の集計が報告されている。

### 2 菌株収集対象医療機関

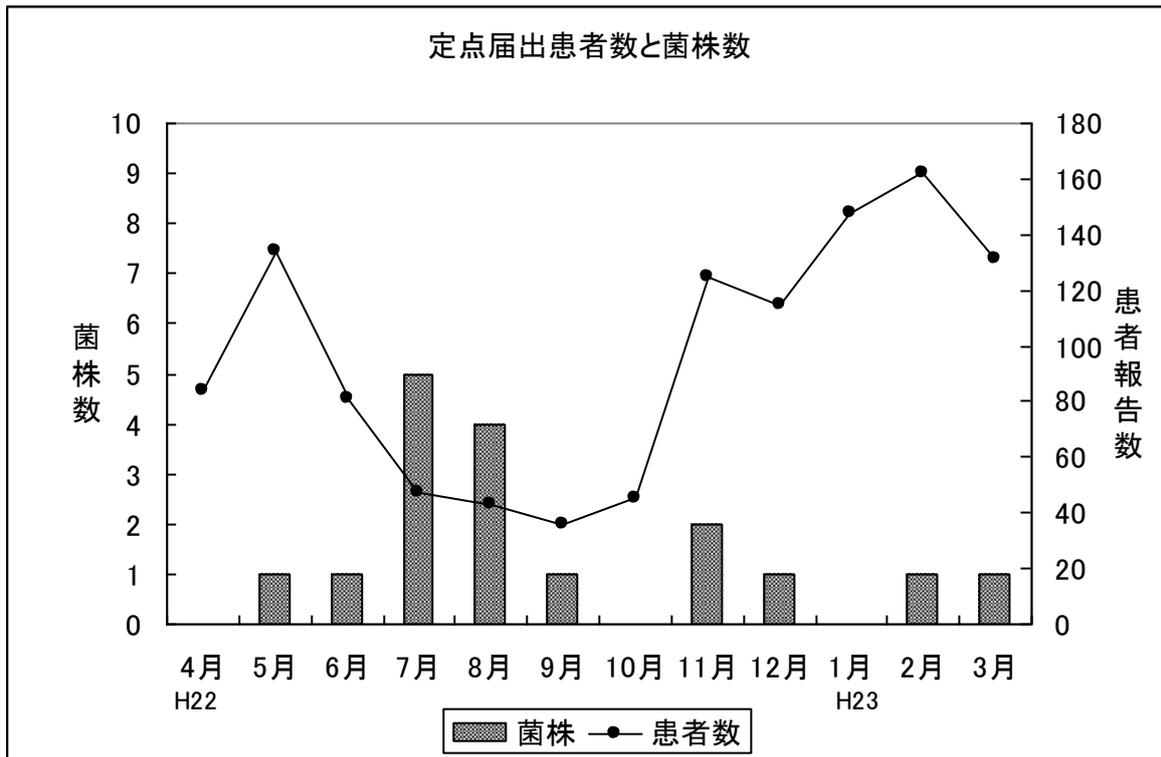
佐賀大学医学部附属病院  
独立行政法人国立病院機構佐賀病院  
佐賀社会保険病院  
地方独立行政法人佐賀県立病院好生館  
唐津赤十字病院  
独立行政法人国立病院機構嬉野医療センター  
独立行政法人国立病院機構東佐賀病院  
伊万里市立市民病院  
唐津東松浦医師会医療センター  
佐賀県医師会成人病予防センター

3 受付菌株及び検体数

菌株17件であった。(表1)

表1 受付数

受付月	菌株			計
	(独)国立病院機構 佐賀病院	(独)国立病院機構 東佐賀病院	(独)県立病院好生館	
H22.4				
H22.5		1		1
H22.6	1			1
H22.7	1	1	3	5
H22.8		2	2	4
H22.9			1	1
H22.10				
H22.11			2	2
H22.12			1	1
H23.1				
H23.2			1	1
H23.3			1	1
計	2	4	11	17



4 検査方法

対象医療機関で分離された菌株及び病原体定点で採取された検体より分離した菌株について、ストレプトコッカス群別キット「ユニブルー」(関東科学)を用い群別を行い、デンカ生研型別免疫血清凝集法によるT型別検査を実施した。

5 結果

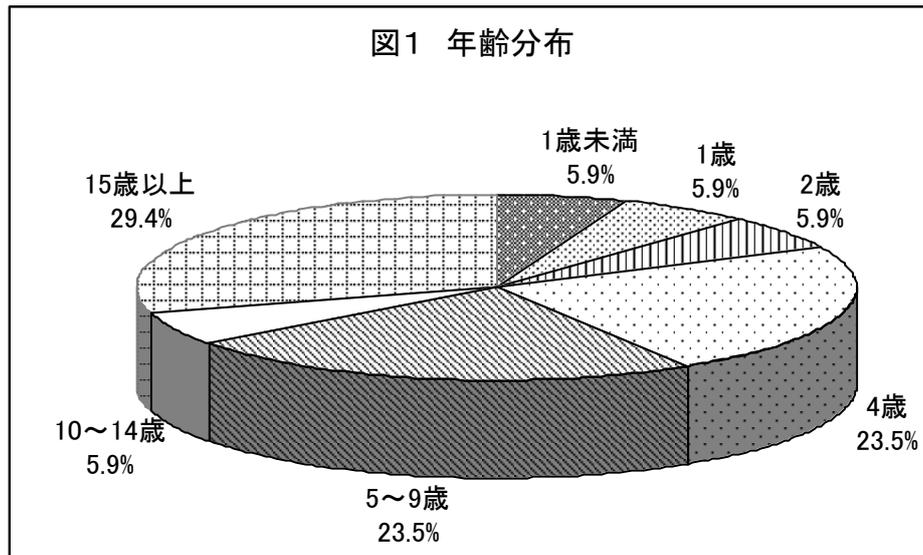
1) A群溶血性レンサ球菌感染者の年齢、検査材料別割合

A群溶血性レンサ球菌 17株であった。

①A群溶血性レンサ球菌感染者の年齢別割合 (表2、図1)

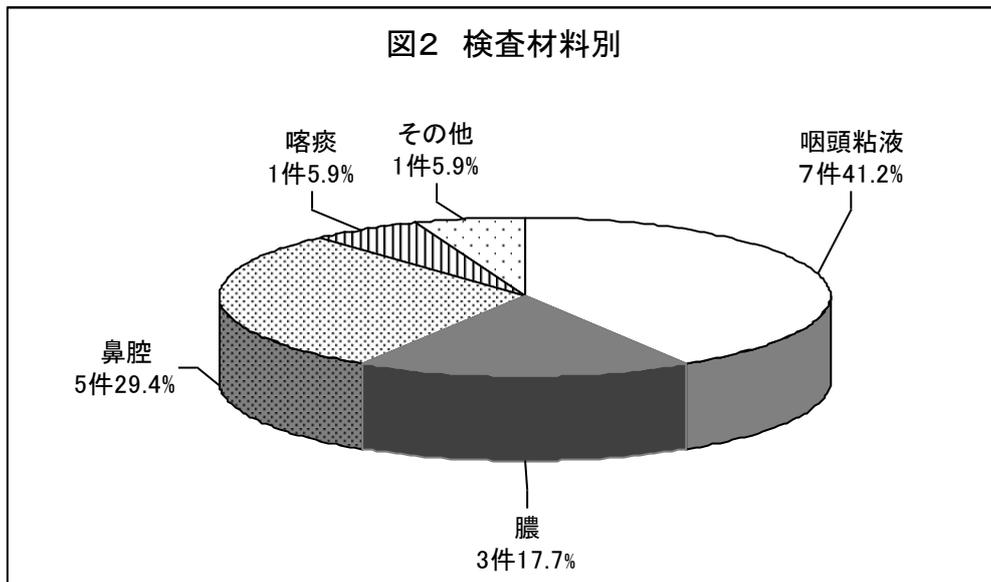
表2 年齢別検体数

医療機関	1歳未満	1歳	2歳	4歳	5～9歳	10～14歳	15歳以上	合計
(独) 国立病院機構 佐賀病院				1	1			2
(独) 国立病院機構 東佐賀病院					3	1		4
(独) 県立病院好生館	1	1	1	3			5	11
計	1	1	1	4	4	1	5	17



②A群溶血性レンサ球菌分離菌株の検査材料別割合

検査材料別では、咽頭粘液が41.2%を占め、次いで、鼻腔29.4%、膿17.7%であった(図2)。

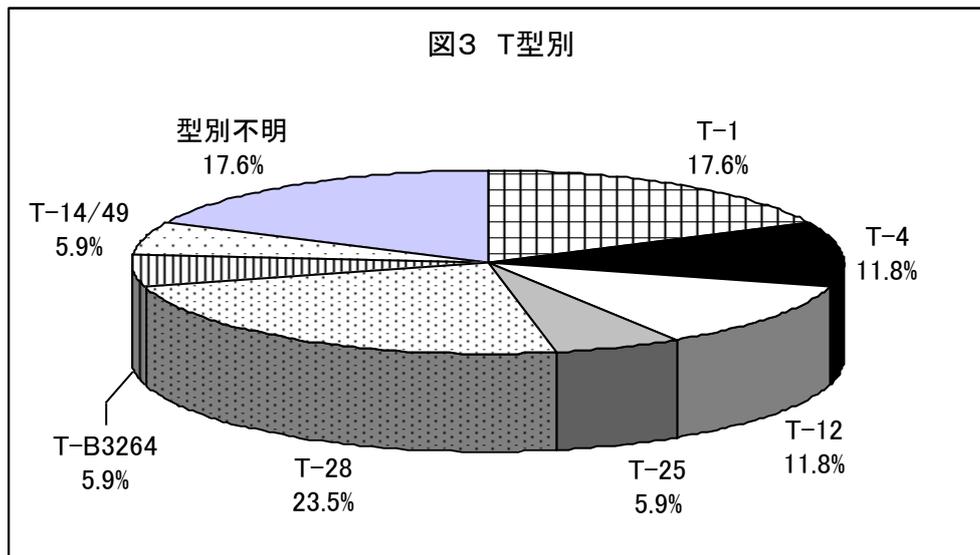


2) A群溶血性レンサ球菌のT型別分類

T型別では、28型 4株 (23.5%)、1型 3株 (17.6%)、4型・12型がそれぞれ2株(11.8%)ずつ分離された。(表3、図3)

表3 月別T型別数

	T-1	T-4	T-12	T-25	T-28	T-B3264	T-14/49	型別不明	計
H22.5		1							1
6	1								1
7	2				2			1	5
8			1		2		1		4
9								1	1
11		1	1						2
12						1			1
H23.2								1	1
3				1					1
計	3	2	2	1	4	1	1	3	17
割合	17.6	11.8	11.8	5.9	23.5	5.9	5.9	17.6	



6 考察

平成22年度に検出されたT型は、1型、4型、12型、25型、28型、B-3264型、14/49型であった。菌株の収集数は前年度より増加したが、病原体定点からの検体収集はできなかった。平成21年度に最も多く検出された12型は減少し、平成22年度に最も多く検出されたのは28型であった。

溶血性レンサ球菌レファレンス事業報告の全国の集計では12型、1型、B3264型が多く検出されている。12型、1型は1992年以降毎年高い分離率を示し、B3264型は平成22年に急激に増加した。